論　文

メンデルスゾーンとランベルト

──「仮象の現象学」から「像の現象学」へ──

Mendelssohn und Lambert

藤　井　良　彦

FUJII, Yoshihiko

1．はじめに

仕立屋の息子であったランベルト（1728-1777）は[1]、12歳までしか学校に行けなかったが、独学によって[2]、科学者となった[3]。そんなランベルトは、カントによって「形而上学的な思弁において無経験[4]」と評された。しかし、このランベルトこそが、ドイツにおいて初めて「現象学（Phänomenologie）」を構想したのである。

おもしろいことに、この現象学においては、「現象（Erscheinung）」という言葉が三回しか使われていない[5]。それもそのはず、ランベルトは、「現象」ではなく「仮象（Schein）」について論じているのである。そこで、この現象学は、カントによって「仮象の論理学」と言われた。しかし、この「仮象一元論」とでも言うべき現象学には見るべきものが多くある。

これに着目したのは、デッサウのゲットーで生まれ育ったモーシェ・ベン・メンデル（1729-1786）であった。このユダヤ人は、モーゼス・メンデルスゾーンと名乗り、ベルリンの紡績工場で会計士として働きながらも、1760年代の後半には、哲学者としての名声を勝ち得ていた[6]。

そんなメンデルスゾーンこそが、ランベルトの『新オルガノン』(1764年）の書評を著したのである[7]。この書評においては、メンデルスゾーンによるランベルト批判が見出される。この批判は、さらなる考察を経て、メンデルスゾーン自身の主張として、晩年の『朝の時間』(1785年）に組み込まれて展開された。メンデルスゾーンは、ランベルトが構想した「現象学」という青写真を現象させることになろう。

ランベルトは、つとにカントの「先駆者」として評価されてきた。そして、ライプニッツ以後カント以前という哲学史における立ち位置から、ランベルトは「ヤヌス的」と性格づけられるに至った[8]。

例えば、「ランベルトは、ヴォルフの立場とロックの立場を調停しようとした。ランベルトは、前者の総合的な証明と、後者の分析を際立たせて、両者の方法論を結び付けようと考えた。ランベルトは、厳密に論証的な手法と同様に、経験原理の必要性も重視したのである。とはいえ、ランベルトによる、論証と経験の仲介は外的なものに留まってしまった。後になって、カントは、ライプニッツとヴォルフの知的体系と経験主義の感覚論との対立を、事柄の根源からして、より

深いところで調停した[9]」。

また、「ベルリン・アカデミーの会員であったランベルトは、数学者としては、オイラーやラグランジュと共に時代の先頭に立ち、哲学者としては、ヴォルフとカントの間にある断絶を、ライプニッツの観念論的な見地とロックの実在論的な見地を結び付けることによって、埋め合わせようと努めていた主としてベルリン・アカデミーにおける折衷主義者たちの中においても、『新オルガノン』や『建築術』〔1772年〕といった著作によって、第一人者としての地位を占めていた。（中略）ランベルトの哲学は、ライプニッツとロックを結び付けることを目指していたが、カントへと至る必然的な過渡期を形成していたのである[10]」。

もちろん、ランベルトが文字通りにカントの「先駆者」であったかどうかは、議論の分かれるところである。とはいえ、従来のランベルト研究は、この点を巡ってなされてきた、と言っても過言ではない。ランベルトは、つねにカントとの比較において読まれてきたのである[11]。こうした傾向は、近年においても続いている[12]。

しかし、ランベルト自身の主張を検討する際には、こうした研究手法では不十分であろう。その結果が、「有り体に言えば、ランベルトの影響は皆無であった。誰も彼の仕事を引き継がなかった[13]」という哲学史における評価ではないのか。カントの「先駆者」という評価は、却ってランベルトから哲学史における固有の立ち位置を奪ってしまっている。

それどころか、ランベルトをカントと比較することが、どれほど有効なことであるか、ということからして別に問われなければならない。確かに、カントにおいては、いわゆる「ヒュームの問題」と並んで、「ランベルトの問題」があったかもしれない[14]。カントにより「ドイツ第一の天才[15]」と評されたランベルトの批判は、間違いなく『純粋理性批判』成立の重要な契機であった。

とはいえ、カントがランベルトの著作を詳細に検討した、という形跡はないのである[16]。

そこで、以下においては、同時代に書かれたメンデルスゾーンによる書評を参考にして、ランベルトの主張を検討することにする。メンデルスゾーンは、ランベルトの『新オルガノン』をつぶさに検討している。この書評を検討することによって、ランベルトがメンデルスゾーンに与えた影響が明らかとなり、ひいては、『朝の時間』におけるメンデルスゾーンの主張が、ランベルト批判としても理解されることになる。

メンデルスゾーンの書評は、『新オルガノン』について、「見たところ、今世紀において出版された著作の中で、最も優れたものの一つ[17]」と述べている。読後、メンデルスゾーンは、「ランベルトの『新オルガノン』を何年か前に読んでいたら、僕の懸賞論文は、きっと机の引き出しにしまわれたままになっていたと思う[18]」と友人のアプトに打ち明けている。

このように、ランベルトに対するメンデルスゾーンの評価は高かった。しかし、メンデルスゾーンは、ランベルトの主張を無条件に受け入れたわけではない。

2. ランベルトの「現象学」

ランベルトは、『新オルガノン』の「序論」において、次のように述べている。「現象学は、こ

れまでほとんど論理学（Vernunftlehre）のうちに現れてこなかったが、真理を仮象から区別するために必要なものである。そこで、現象学は、専ら直接的に、いわゆる論理学的な真理に関わっているわけではない。むしろ、それは形而上学的な真理に関わっているのである。なぜなら、たいていの場合、仮象は実在的なもの（das Reale）に対して定立されているからである[19]」。

こうしたランベルトの主張を踏まえて、メンデルスゾーンは、「〈現象についての一般的な理論〉に関しては、つまり、いかにして現象を諸々の実在性から区別するのか、ということに関しては、これまで全く考えられてこなかった[20]」と言う。もちろん、この「現象についての一般的な理論」を創出したのが、他ならぬランベルトだ、ということになる。（この「現象についての一般的な理論」という言い方は、同時期にカントがランベルト宛の書簡において用いた「一般現象学（phaenomologia generalis）」という言葉を思わせよう[21]。）

このように、ランベルトにおいても、メンデルスゾーンにおいても、これまでは「現象学」がなかったが、それは真理と仮象を区別するために、或は実在性と仮象を区別するために必要な論理学である、と認識されていたのである。

では、ランベルトにおける「現象学」とは何か。

まず、ランベルトの基本的な認識は次のようなものである。「人間の認識は、我々の諸概念を言葉と記号に結び付け、そうした言葉や記号の表象によって、それらによって指示されている諸概念や諸事物の諸々の像を、再び感官にもたらし、忘れないようにさせるという、いわば我々にとって必要なことにのみ関わっているわけではない。我々が、諸概念や諸表象を段々と獲得していく仕方は、それらのうちにさらなる混乱をもたらし、諸概念の正当性や、諸概念と諸事物そのもの（Dinge selbst）との一致を、多くの場合において、それも様々な原因から困難にする[22]」。

この箇所、とりわけ前半部はヴォルフ批判としても読める。ランベルトにおいては、「事象-概念-語」という三項関係が揺らぎつつある。そこで、後半部においては、いわゆる「真理の対応説」が問われているのである。ランベルトにおいては、もはや「概念」と「事物そのもの」が対応している、とは簡単には言えない。なぜなら、我々には「事物そのもの」が端的に認識されているわけではないからである。

ランベルトは言う。「我々は端的に真と偽を対立的に定立しているのではない。我々の認識のうちには、真と偽の間に、仮象と言われる中間物（Mittelding）が見出される[23]」。

こうして、「中間物」としての「仮象」が問われることになる。

そこで、「根本学」の一分野である「現象学」としての「仮象の理論」が要請される[24]。

ランベルトによれば、従来の「仮象の理論」は、視覚の仮象のみを対象とした光学であった[25]。そこで、ランベルトの試みは、メンデルスゾーンも指摘することであるが、視覚以外の感覚にも、この理論を適用することである[26]。こうして構想された現象学は、「超越的な光学[27]」、或は「超越的なパースペクティヴ[28]」とも言われる[29]。

では、ランベルトにおいて、「中間物」とされる仮象とは何か。それは、次のような仮定から生じる。つまり、「感覚は、〈現実的に我々の外に見出される事象〉によって惹き起こされる。そ

のようなあらゆる場合には、〈そうした事象が、実際に（in der That）何であるか、ということの概念〉と、〈そうした事象が、感覚を通じて我々のうちにもたらすところの概念〉が、或る種の関係のうちに存している[30]」という仮定である。

しかし、「我々が、専ら〈現実に我々の外に現存している事象〉の感覚によって獲得するところの概念は、事象が現存しなくとも、つまりは事象が感官に作用しなくとも、我々のうちに生じ得る[31]」。

そうすると、仮象を惹き起こす原因は、感覚そのものではなく、それ以外のものであるようにも思われる。そこで、ランベルトは、意識や記憶、構想力なども仮象の原因となる[32]、と言うのである[33]。こうした仮象は、「主観的な仮象」と言われる。

とはいえ、あくまでもランベルトは、仮象の原因として、感覚と共に、意識なども認めているに過ぎない。ランベルトにおいては、そもそも感覚そのものが仮象を生じさせる原因である。従って、感覚に基づく仮象は「客観的な仮象」と言われ、「主観的な仮象」とは区別される。

また、ランベルトにおいて、「主観的な仮象」とは、「器質的な仮象[34]」であるとか、「病理的な仮象」とも言われているように[35]、生理的な意味での内的な感官に基づくものでもある。それに対して、「客観的な仮象」は外的な感官に基づく。

そこで、こうした「客観的な仮象」は、「心理的な仮象」とは区別されて「物理的な仮象」とも言われる。この場合、「事象は、現実的に現に存在し（da ist）、諸感官に印象を与える[36]」。しかし、「印象は、実際には〔＝それ自体としては〕物理的であるが、感覚が惹き起こすところの概念は、事象を、それ自体（an sich）あるがままに把握するのではなく、単に我々がそれを感覚する通りに表象するだけである[37]」。

このように、ランベルトにおいて、「実際に」とか「それ自体」などと言われている「事象」とは、「現実的に我々の外に現存している事象」のことである[38]。従って、ランベルトにおける「客観的な仮象」、或は「物理的な仮象」は、「仮象」とは言っても、夢幻の如きものではない[39]。

とはいえ、こうした「事象」は、あくまでも感官を通じてのみ現象する。従って、「仮象」が「事象」自体を現象しているのかどうか、ということは、やはり感官によって確かめられるしかない[40]。そうした意味では、「主観的な仮象」と「客観的な仮象」という区別でさえも、結局は段階的なものに過ぎない[41]。そこで、どちらの場合においても、「〈事象の像〉を諸思考のうちに表象する運動が感覚神経に起る、ということは共通している[42]」と言われる。

こうして、感官から始まる人間の認識は[43]、「事象の像」として、おしなべて「仮象」の身分を与えられることになる。

ところで、ランベルトにおいて、確かに「仮象」は「実在的なもの（das Reales）」の対概念であるが[44]、同時に、「仮象」は感官を通したものである限りにおいて、「実在的（real）」であるとも言われる。これは、「仮象一般」と「単なる仮象」の区別としても説明される。

まず、「単なる仮象」においては、「実在的なものが何も根拠として存していない[45]」。

その一方で、「〔色や音などの感性的な〕概念は、諸物体を単に〈感性的な像〉、つまりは仮象に従って表象するのみであるが、そうした仮象は実在的なのである。つまり、そうした概念が外

的な諸対象によって現実に惹き起こされている限りにおいて、そうした仮象は、単に主観的なものではなく、同時に客観的なものでもある[46]」。そこで、「実在的な仮象[47]」、さらには「実在的で物理的な仮象[48]」という言い方までされる。

ここで、「仮象」が「感性的な像」とされていることに注目しよう。「仮象」は、もちろん「事象」自体ではなく、あくまでも「事象の像」に過ぎない。それも、感官を通じて現象した「事象の像」であるから、「感性的な像」である。つまり、「こうしたあらゆる〔感性的な〕概念は、諸物体における本質的なものではなく、単なる諸変様であり、可能性である[49]」。

しかし、こうした「像」は「事象」自体ではないにせよ、確かに「事象」自体の「像」である[50]。従って、観念論は「観念的な仮象」として斥けられる[51]。ランベルトにおいては、「像」として現象している「事象」自体の存在は、あくまでも自明視されている。そこで、「像」は「記号[52]」とも言われる[53]。

とはいえ、「像」と「事象」自体の対応関係は簡単には言えないだろう。なぜなら、両者には感官が介在しているからである。それどころか、そもそも、そのためにあらゆる「像」が「仮象」とされたのであった。

このように、「仮象」は「事象の像」である限りにおいて、「実在的な像」であり、「単なる仮象」とは区別されるが、やはり、像である限りにおいて、仮象であることに変わりはない[54]。ここには、像は像である限りにおいて仮象である、という事態が見られる。ともあれ、この事態は、形而上学においては、「自我論者（観念論者）」ではなく、「超越的な光学者」であれ、というランベルトの要求の帰結なのである[55]。

畢竟して、「事象」自体は、やはり感官を通じて「感性的な像」として現象する他ない[56]。そこで、こうした「仮象」としての「像」の在り方を問う「現象学」が要請されたのであった。従って、ランベルトは、自身の現象学を「像の理論[57]」とも呼ぶのである。

3. メンデルスゾーンの書評

書評におけるメンデルスゾーンの批判は、次のようなものである。

メンデルスゾーンによれば、「ランベルト氏は、本来的には視覚の現象学であるところの光学やパースペクティヴの理論を、還元によって一般的なものとして、我々のあらゆる感官のみならず、我々のあらゆる認識能力にまで拡張することを試みている[58]」。

ここで、メンデルスゾーンは、ランベルトによって、「視覚の現象学」が一般化されて、他の感官のみならず、認識能力一般にまで拡張された、と指摘している。もちろん、このことはランベルト自身も言っていることであるから、とくに意味深いものではない。とはいえ、あくまでもこの点にメンデルスゾーンが着目している、という事実は重要である。つまり、ランベルトは、カントの言うところの「一般現象学」を構想している、という点にメンデルスゾーンが注目しているという事実は、この書評が目指している点を明らかにしているのである。

それは、次のような批判である。「ランベルト氏は、仮象という言葉をとても広い意味で用いている、と言えるだろう。真理と誤謬でさえも、それらが誰かに真であると思われている（wahr

zu sein scheinen）限りにおいて、仮象という言葉のもとに含まれるのだ[59]」。

そこで、メンデルスゾーンの書評は、次のようにして締め括られる。「語法の上では、誤謬は空虚な仮象から、或は単なる現象から区別される。つまり、誤謬によっては、知性〔＝上級の心的能力〕による誤った判断が意味され、空虚な仮象によっては、下級の心的能力〔＝感覚〕による判断が意味されよう。こうした違いは、見逃されてはならないだろう[60]」。

まさに、この「誤謬」と「仮象」の区別こそが、この書評から20年後に執筆された『朝の時間』におけるメンデルスゾーンの主張である。同書は、「真理とは何であるか」という問いと、「いかなる徴表でもって、我々は真理を認識し、それを仮象（Schein）と誤謬（Irrtum）から区別するのか」という問いから始まっている。

4. メンデルスゾーンにおける「感官の仮象」

まず、第一の問いについて、次のように言われる。「可能的で現実的なあらゆる事物は、いわば諸々の原像（Urbild）であり、我々の諸々の概念や思想は、その写像（Abbildung）であって、言葉は諸思想の影（Schattenriß）のようなものである。写像が、予像（Vorbild）に適合するもの以外には何も含んでいなければ、また、影が写像に含まれているものを正確に示しているならば、これら三つのもの〔事物と思想と言葉、或は原像と写像と影〕の間には完全な一致があり、これを我々は真理と呼ぶ[61]」。

しかし、これでは問題が生じるとメンデルスゾーンは言う。なぜなら、「諸思想と、その諸対象とを、つまり模像（Nachbild）と、その原像とを比較するための、いかなる手段もない。我々は、単に模像と向き合っているだけであり、それも唯一その模像によってのみ、原像を判断することができる[62]」。

このように、メンデルスゾーンにおいては、「事象-概念-語」という三項関係が、「写像」或は「模像」のもとに一元化される、という事態が見られる。従って、メンデルスゾーンにおける「像の理論」は、ランベルトにおける「事象-像」という二項関係が否定されるところから始まるのである。

次に、「仮象」と「誤謬」の区別について論じられる

まず、「感性的な認識」について次のように言われる。「視覚や聴覚のあらゆる錯覚（Täuschung）は、我々の感覚能力が制限されていること、つまりは我々の感官の状態や性状によって左右されるということに基づいている[63]」。以下に見るように、この「錯覚」は「感官の欺き（Sinnenbetrug）」とも言われる。

また、「理性認識」における「あらゆる誤り（Falschheit）は、知性の弱さや判明な認識能力の制限に基づいている[64]」。ここで言われている「誤り」とは、判断における「偽（Falsch）」のことである。

そして、「我々の外なる現実的なものの認識」における「誤謬（Irrtümer）は、これらと同一の源泉から生じてくる[65]」。（この「同一の源泉から」という言い方は不明瞭であるが、「誤謬」と

「錯覚」は、「同一の源泉から」生じるという意味である。）

また、次のようにも言われる。「真理とは、我々に具わった心的な諸力の働き（eine Würkung unsrer positiven Seelenkrafte）であるところの、あらゆる認識や思想のことである。しかし、この思想が、無能力（Unvermögen）の帰結である限り、つまり我々に具わった諸力の制約により変様を被っている限り、それは非真理と呼ばれる。そして、この非真理の責任が、上級の心的諸力の無能力にあれば、つまりは知性、或は理性の欠陥にあれば、我々は認識の偽を、誤謬と呼ぶ。しかし、いわゆる下級の心的諸力〔＝感覚〕の錯覚によって、我々が唆されたのであれば、認識の偽は、錯覚、或は感官の欺きと呼ばれる[66]」。

このように、「認識の偽」には二種類ある。それは、「同一の源泉から」生じるところの、「誤謬」と「錯覚」である。しかし、両者はあくまでも区別される。

では、どのようにして「誤謬」と「錯覚」は区別されるのか。

メンデルスゾーンによれば、「間違った判断や誤謬推理は、知性の正しい使用によって訂正され、真理に転じ得るものである。しかし、感官の仮象（Sinnenschein）は変わらずに残る[67]」。

なぜなら、例えば、「緑色は青色と黄色から合成されている」ということが証明されたとしても、当然ながら緑色は依然として緑色に見える。そうすると、この緑色は「錯覚」なのか？

確かに、「緑色は青色と黄色から合成されている」ということが、理性による判断として正しければ、そのようにして合成された色が、緑色として見えているに過ぎない、ということになろう。しかし、そうであっても、そうした色が緑色に見える、ということに変わりはない。

また、別の例では、コペルニクスによって、「太陽が地球を回っている」のではなく、「地球が太陽を回っている」ということが証明されたとしても、依然として、我々には「太陽が地球を回っている」ように見える。では、そのように見える、ということは「感官の欺き」なのか？

確かに、「太陽が地球を回っている」ということは、コペルニクスによって「誤謬」とされた。しかし、「太陽が地球を回っている」ように見える、という「感官の仮象」は変わらない。「太陽が地球を回っている」という判断が、理性によって「誤謬」とされれば、同時に「感官の仮象」は「錯覚」であった、ということになる。とは言っても、「太陽が地球を回っている」という「感官の仮象」は、つまり、そのように見える、という現象そのものは変わらない。

そこで、「感官の欺きの主要な源泉は不完全な帰納〔＝理性推理〕である[68]」と言われる。つまり、「太陽は地球を回っている」と判断されるならば誤っている。なぜなら、この判断は理性を正しく働かせることによって「誤謬」と看做されるからである。「地球が太陽を回っている」という判断の方が正しい、ということになれば、同時に、「太陽が地球を回っている」ように見える、という「感官の仮象」は「錯覚」と看做されることになる。

しかし、たとえ「感官の仮象」が「錯覚」であるとしても、依然として、「太陽が地球を回っている」ように見える、ということに変わりはない。つまり、それは感性的な認識としては、「誤謬」でもなければ「錯覚」でもないのである。言うならば、それは端的に現象である。そこで、メンデルスゾーンは、「感官の仮象」は「感性的な確信の不可抗力[69]」を持つ、と言う。

以上において言われたことは、メンデルスゾーン自身によって、次のようにまとめられている。つまり、「感官の欺きにおいては、つねに論理的な誤りが根拠として存している。誤った仮象（falsche Schein）は、理性認識の誤謬と共に等しい源泉から生じる。不完全な帰納や、不十分な類推、根拠なく仮定された因果結合などから導かれた間違った推理によって、我々の感性的な認識は、決して現実的には現存していない客体を推理する、或は現実的には適合しない性質をそうした客体に帰することになる。一言で言えば、感官の欺きと理性の誤謬は、どちらも等しい起源を持っている。認識の無能力から、或は我々の表象力の制限から、感性的な認識においては誤りが、理性認識においては間違ったことがもたらされる。前者においては、誤った仮象が、後者においては誤謬が生じる[70]」。

この引用文における「誤った仮象」という言い方は、ランベルトにおける「仮象」と「単なる仮象」の区別を思い起こさせる。これは、「中間物」という「仮象」のあやふやな身分を示すものでもあった。

しかし、メンデルスゾーンは、「錯覚」と「誤謬」を区別するために、「仮象」と「誤った仮象」を強く区別する。そのために、いわば現象そのものである「感官の仮象」とは区別して、「感官の欺き」や「錯覚」が「誤った仮象」と言われているのである。その結果、「感官の仮象」と言われているものが、つまりはランベルトにおける「仮象」のニュアンスを引きずりながらも、あくまでも「錯覚」とは区別されたものとしての現象が主題化されることになる。

そこで、以下においては、「感官の仮象」は、強く「感官の現象」と言われるようになる。

5. メンデルスゾーンにおける「感官の現象」

ところで、『朝の時間』は、早朝に、メンデルスゾーンが子供たちに授業をしているという設定のもとに書かれている。以下においては、子供たちの質問にメンデルスゾーンが答えている。

子供「僕は水面に友達の像を見ましたが、右を向けば、僕は現実に僕の傍に立っている友達を見ます。この時、僕には仮象が認識された、ということとまさに同じ意味で、僕には真理が示されたのです。僕たちは、一方の場合には〔心に〕具わった力が現象をもたらし、また他方の場合には、その力の制限が現象をもたらしていた、と言うことはできないでしょう。どちらの場合にも、感官は、つまり視覚器官は、自身の役割を果たしており、すべきことをしているのです。そうすると、前者を仮象と看做さなければならない一方で、後者を真理と看做さなければならない理由は何でしょうか？[71]」。

水面に友達の像を見るのも、現実に傍らに立っている友達を見るのも、どちらの場合にも友達の像が見えていることに変わりはない。すると、その一方を仮象と呼び、他方を真理と呼ぶ理由は何であろうか？（ランベルトにおいては、仮象と真理は対概念であった。）

子供「もう一つ別の例です！　雲のまにまに虹が輝いて見えるのに、知られているように、虹は〈単なる仮象〉であり、決して現実性でもなければ真理でもない、ということは、僕たちの視

覚に具わった力によるものではなく、光学の真なる法則によるものですね？[72]」。

この例は、ややランベルト的な問題関心に基づいている。つまり、虹は「単なる仮象」である、という科学的な真理と、雲のまにまに虹が見える、という視覚の仮象をどのように両立させるのか、ということである。

まず、メンデルスゾーンは、最初の質問に対して次のように答えている。「視覚器官が錯覚の原因であるとは主張していない。むしろ、視覚器官に関する限り、どちらの場合においても、それは純粋な真理を表明していると主張しているのだ。〈感官の現象〉として、君が水面に見た像は、他の像と比べても劣ることのない真理を持っている。そのどちらも、感官に具わった力の働きなのであり、私の考えに従えば、欺くことも錯覚を起こすこともできない[73]」。

これがメンデルスゾーンの主張であった。現象そのものは、いわば端的に現象であるから、それ自体としては「感官の欺き」とも「錯覚」とも言われ得ない。従って、どちらも単なる「仮象」ではなく、「真理」である。（ここでは、先に言われていた「感官の仮象」が、強く「感官の現象」と言われている。）

子供「そうすると、そもそも何が混乱の原因なのでしょうか？　どちらの視覚像も真理を表しているならば、一方の像が、僕に友達を、この友達がいない場所において示し、他方の像が、この友達を、この友達が〈現実に現存している〉場所において認識させるということが、なぜ起こるのでしょうか？[74]」。

メンデルスゾーン「それは要するに、現存している、という言い方に問題（Knoten）があるのだ。君は現実的である（würklich seyn）とか、現存している（vorhanden seyn）という言い方によって何を意味しているのか？[75]」

水面に映った友人の像も、傍らに見た友人の像も、どちらも「視覚像」であることに変わりはない。前者が「錯覚」と言われるのは、実際には友人が傍らに「現存している」と言われる場合のみである。

ランベルトにおいては、「感性的な仮象」或は「感性的な像」は、「事象」自体によって惹き起こされたものである限り、「単なる仮象」とは区別されて、「実在的」と言われた。つまり、あくまでも「事象の像」である限り、「感性的な像」は、仮象とは雖も「実在的」なのであった

しかし、メンデルスゾーンにおいては、像は「事象の像」と看做されることによって、却って仮象に転じるのである。ここには、ランベルトとは逆の事態が見られる。ランベルトにおいて、像は視覚像である限り仮象である[76]。その一方、メンデルスゾーンにおいて、像は視覚像である限りにおいて、仮象ではなく、現象なのである。

つまり、事情は次のようである。「私は単に、あの友人の像が、一方の場合には欺く像であり、他方の場合には〈現実的な像〉である、ということを、君がどのような徴表によって認識するのか、ということが知りたいのだ。君は、おそらくこのことを、これが君の友人の既知の声が水面からではなく、君の傍から聞こえたということ、また、君が友人を抱擁する、或は何がしか手に

よって感覚しようとするならば、右側に手を伸ばさなければならない、ということから知るのではないか？　こうしたことが、仮象を現存在から、或は単なる仮象を現実的な実体から区別する指標なのではないか？――こうしたことが認められたとして、私はさらに、かくして視覚は錯覚の原因ではなかった、と結論する。心の判断こそが、君を騙していたのであった。君は、視覚の像に、いつもそれに結び付いているところの聴覚や触覚の現象を予想した。しかし、この予想は、今度ばかりは違った。この予想の根拠は、既に見たように、不十分な帰納であり、多くから全てへ、そして、たびたびからつねにへと進む推論である。この推理が欺くならば、それは明らかに我々の弱さの、つまりは我々の認識諸力の欠陥や制限の作用である[77]」。

同様に、虹についての質問に対しても次のように答えられる。「虹を輝かせる強い色彩は、そうした色彩が帰されるところの確固とした対象（Gegenstand）を君に予想させる。しかし、理論ばかりか、経験までもが、虹は雲を成り立たせている水蒸気のまにまに浮かんでいるだけであり、君が立ち位置を変えれば、虹も位置を変える、ということを認めさせる。この場合も、君を欺いていたのは、君の感官に具わった諸力の働きとしての視覚ではない[78]」。（メンデルスゾーンにおいては、GegenstandとVorwurfは区別されて使われているが、これについては別の機会に述べることにしたい。）

同様の主張は、さらに「表象」と「描写（Darstellung）」という区分によっても説明される。「直接的で直観的な認識は、理性も知性も必要としない。従って、それらの間違った使用によっては、決して誤って導かれることはない。では、錯覚、或は感官の欺きとは何であろう？　我々は、〈我々が外なる諸対象を推理する場合〉にのみ、つまり、〈我々の認識が単なる表象であるばかりか、描写でもあるべき場合〉にのみ、錯覚や感官の欺きが生じるということを考察してきた。こうした場合には、理性的な認識において生じ、しばしば誤った帰結へと導くところの誤謬推理が、感性的な認識にまで及ぶ。心の内なる諸表象として看做される限りは、そうした認識においては、誤謬も錯覚も生じない。誤謬推理が、前者においては、誤謬を生じさせるように、後者においては、習慣を通じて、錯覚や感官の欺きを生じさせる。しかし、我々が感性的な認識に留まっている限り、それも、我々がそれを描写ではなく、単に表象として看做す限りにおいて、懐疑を受けることも、不確実性を被ることもなく、〈最高度の直観性（Augenscheinlichkeit）〉を伴うのである[79]」。

このように、「感性的な認識」、或は「直接的な認識」は、「表象」である以上に、何か「外なる諸対象」を「描写」したものだ、と理性推理されることによって、錯覚に転じ、欺きとなる可能性が生じる。ただし、その場合は、この「描写」も誤謬となる。（錯覚と誤謬は「同一の源泉から」生じる。）

しかし、「感性的な認識」は、「心の内なる諸表象」に留まっている限り、決して「錯覚」などではない。それどころか、それは「最高度の直観性」、或は「最高度の確信[80]」を伴う。メンデルスゾーンにおいて、この直観性は、「純粋な理性認識」における明証性と、不完全な帰納（理性推理）に基づいた「理性認識」における蓋然性に並ぶ、「感性的な認識」における真理性である。

6. 「仮象の現象学」から「像の現象学」へ

ランベルトの「現象学」においては、あくまでも真と偽の「中間物」としての仮象が問題とされていた。これは、積極的に評価すれば、仮象に対して真と偽の「中間物」という位置づけを与えることで、仮象を独立した考察の対象とした、という意味において、確かに「現象学」を基礎づける試みであった、と言える。

しかし、そのために却って、「中間物」とされた仮象は、いわば現象としての固有の身分を持つことがなかった、と言える。ランベルトにおいては、終始、「真理の王国」と「現実性の王国」という二分法があった。ランベルトが、「学的な認識」は「視覚圏（Gesichtskreis）を越えている[81]」と言う時、「超越的な光学者」の目は現象そのものを見てはいなかった。ランベルトの目は、像が写し出しているものへと向けられている。そのために、せっかくの現象学も「仮象の現象学」に留まってしまったのである[82]。

つまり、ランベルトにおいては、真偽という二値論理が自明視されていたために、「事象」自体の像に過ぎない仮象は、固有の真理性を持つことができなかったのである。言い換えれば、「事象そのもの」が自明視されている限り、像は仮象に過ぎない。そうした意味では、ランベルトの「現象学」は、文字通りにカントの言うところの「単に消極的な学（blos negative Wissenschaft）[83]」としての「一般現象学」に留まってしまった、と言えよう。ともあれ、これはランベルトが「学的な認識」に拘ったために生じた必然的な帰結である。

それに対して、メンデルスゾーンにおいては、「感性的な認識」としての仮象には、「直観性」という真理性が与えられている。これによって、仮象は「中間物」としてのあやふやな身分を脱して、固有の真理性を伴った、独立した存在性を持つことになった。そこで、メンデルスゾーンにおいて、仮象は錯覚とは区別されて、強く現象と言われたのである。この場合、ランベルトにおいては、「事象の像」である限りにおいて「実在的」と看做されていた像は、却って、そのように「事象の像」として、つまりは事象の「描写」として看做されることによって仮象に転じるという正反対の事態が見られた。

ランベルトにおいて、像は「視覚圏」を超えることによって、仮象となるが、メンデルスゾーンにおいては、「感覚圏（Empfindungskreis）[84]」に留まる限りにおいて、像は現象としての身分を保つのである。メンデルスゾーンの目は、像として現象している限りにおける圏域を見ている。

とはいえ、メンデルスゾーンにおいても、現象は像であることに変わりはない。それも、あくまでも「写像」である。そうは言っても、この像は現存している「事象」自体の像ではなかった。すると、この「対象（Gegenstand）」としての「事象そのもの」を失った像は、いったい何を写し出しているのであろうか。

どうやら、この像は「対象（Vorwurf）」としての「原像」を写し出している。或は、最後期の知識学[85]におけるフィヒテの言葉を援用すれば、この像は「原像」が「自己現象」したものである、と言えそうである。ここには、像が像を写し出す、或は像が像として現象する、というような奇妙な事態が見られる。これは、写実的とも構成的とも言えない「像の現象学」である。

言うならば、ランベルトにおける像が、ロックにおける「写し（copy）」のようなものであれ

ば、メンデルスゾーンにおける像は、ライプニッツにおける「像（image）」のようなものであり、「表出」という性格を持っている。

かくして、ランベルトとメンデルスゾーンは、どちらも「像の理論」を構想してはいるが、像の存在性格をめぐって相反する関係にある。ランベルトの現象学が「仮象の現象学」であれば、メンデルスゾーンの現象学は、いわば「像の現象学」とでも言うべきものであるが、これは、あくまでもランベルトの現象学を批判することから構想されたものであった、ということである。

註

1 「ランベルトの幾何学の才能は、早くも父親の仕事場で発揮された。ランベルトは、節約した生地の裁断法を発見したのである」。G. Siegwart, Einleitung, p. XI. in; J. H. Lambert, *Texte zur Systematologie und zur Theorie der wissenschaftlichen Erkenntnis*, Siegwart (hg.), 1988., pp. VII-LXXXVII.

2 よく指摘されることであるが、ランベルトは「独学者 (Autodidactos)」であった。この事実は、おそらく最初にC. H. ミュラーによって指摘された。*Joh. Heinrich Lamberts logische und philosophische Abhandlungen. zum Druck befördert von J. Bernoulli*, Bd. 1, 1782., p. xiv.

3 ランベルトは、一般にオイラーと並んで「数学者」と言われているが、その業績や関心事からして、端的に「科学者」と呼んだ方が適切であろう。ランベルトの「現象学」は、科学者の現象学である。

なお、ランベルトの生涯については以下を参照。D. Huber, *Johann Heinrich Lambert nach seinem Leben und Wirken*, Basel, 1829.; J. Lepsius, *Johann Heinrich Lambert*, München, 1881.; C. J. Scriba, Lambert. in; *Dictionary of Scientific Biography*, C. C. Gillispie et al.(eds.), New York, Vol. 7, 1970., pp. 595-600.; G. Wolters, *Lambert, Johann Heinrich*. in; *Enzyklopädie Philosophie und Wissenschaftstheorie*, J. Mittelstraß (hg.), in Verbindung mit Wolters, Mannheim, Bd. 2, 1984., pp. 530-532.

4 Von Kant an J. Bernoulli, 16 Nov, 1781.

5 『新オルガノン』第二巻の第四部「現象学」における使用頻度。cf. N. Hinske, *Lambert-Index*, Frommann-Holzboog, Bd. 2, 1983.

6 メンデルスゾーンの生涯については、日本語で読める論文が数編ある。桑木嚴翼「モーゼス・メンデルスゾーン」(同『哲学体系及其他』所収、新生堂、1924年)。山下肇「モーゼス・メンデルスゾーンの位相」(『思想』岩波書店、第611号、1975年５月、654-669頁)。内田俊一「モーゼス・メンデルスゾーンという悲劇」(『法政大学教養部紀要 外国語学・外国文学編』法政大学教養部、第89号、1994年、67-80頁)。同「モーゼス・メンデルスゾーンの生涯」(『法政大学教養部紀要 人文科学編』法政大学教養部、第109号、1999年、１-31頁)。大内宏一「「ドイツのソクラテス」そして「ベルリンのユダヤ人」」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第４分冊、第48輯、2002年、137-150頁。)

なお、あまり知られていないようだが、桑木はランベルトについても書いている。「ランベルトとカント」(同『哲学乃至哲学史研究』所収、岩波書店、1936年。) これは、昭和８年のカント・アーベントにおいて講演されたものである。付言すれば、先に挙げた「モーゼス・メンデルスゾーン」は、「哲学会公開講演」と記されているが、年号は記されていない。ただ、どちらの講演も、『カントとその周辺の哲学』と題された『桑木嚴翼著作集 第三巻』(春秋社、1949年) に再録されている。

こうした桑木の先行研究について、筆者は「日本カント協会」第35回学会（2010年）における宮島光志氏の研究発表「桑木厳翼とカント文献学」によって知った。

7　同書の第一巻に関する書評は1766年に書かれ、その翌年に第二巻の書評が書かれた。
メンデルスゾーンの書評に関しては、アルントによって批判的な言及がなされている。H. -W. Arndt, *Einleitung*, p. XXXVIII. in; J. H. Lambert, *Philosophische Schriften*, Arndt (hg.), Hildesheim, Bd. 1, 1965., pp. V-XXXVIII.

8　cf. W. S. Peters, I. *Kants Verhältnis zu J. H. Lambert*, p. 448. in; *Kantstudien*, 59 Jahr., Heft 4, 1968., pp. 448-453.

9　A. Riehl, *Der Philosophische Kriticismus*, Bd. 1, 1876., pp. 180-181.

10　R. Zimmermann, *Lambert, der Vorgänger Kant's*, p. 2. in; *Denkschriften der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften*, Wien, Bd. 29, 1879., pp. 1-74.

11　例外的には、坂本氏が、カントとの比較を全く抜きにしてランベルトについて論じている。坂本賢三「Ｊ．Ｈ．ランベルトとその論理学」(『人文学報』京都大学人文科学研究所、第45号、1978年、53-72頁)。また、山本氏の論文も、カントとの関係に特化せずにランベルトについて広範に論じている。氏は、「カントがランベルトとはまったく異なった哲学史的文脈に位置していた点」を指摘している。山本道雄「ランベルトの夢」、307頁。(『カントとその時代』所収、晃洋書房、2008年)。

12　cf. C. Debru, *Analyse et Représentation de la Méthodologie à la Théorie de l'Espace: Kant et Lambert, Paris*, 1977.; E. W. Orth, *Can Phenomenology in Kant and Lambert be connected with Husserlian Phenomenology?*, in; *Kant and Phenomenology*, T. M. Seebohm, J. J. Kockelmans (eds.), The Center for Advanced Research in Phenomenology and America UP, 1984.

13　L. W. Beck, *Early German Philosophy*, Harvard UP, 1969., p. 441.

14　Beck, *Lambert und Hume in Kants Entwicklung von 1769-1772*. in; *Kantstudien*, 60 Jahr., Heft 2, 1969., pp. 123-130.

15　Von Kant an Lambert, 31 Dez, 1765.

16　これは、つとに指摘される事実である。例えば、以下を参照。中島義道「ランベルトの現象学」260-262頁。(『講座ドイツ観念論１』弘文堂、1990年、257-288頁。)；藤本忠「ランベルトとカント」３頁。(『龍谷哲学論集』龍谷哲学会、23号、2009年、１-27頁。)

17　M. Mendelssohn, *Gesammelte Schriften, Jubiläumsausgabe* [henthforth: *JubA*], Gemeinschaft mit F. Bamberger, H. Borodianski, S. Rawidowicz, B. Strauß, L. Strauß, begonnen von I. Elbogen, J. Guttmann, E. Mittwoch, Berlin, 1929-1932, Breslau 1938; fortgesetzt von A. Altmann in Gemeinschaft mit H. Bar-Dayan, E. J.Engel, L. Strauß, W. Weinberg, Stuttgart-Bad Cannstatt 1974 ff. Bd. 5-2, p. 31.

18　Vom Mendelssohn an T. Abbt, 12 Juli, 1764. in; *JubA*, Bd. 12-1, p. 45.

19　Lambert, *Neues Organon*, 1764, Bd. 1, Vorrede, unpaged. ランベルトにおける「論理学的な真理」と「形而上学的な真理」の区分については、例えば『建築術』の297節を参照。cf. Arndt, op. cit., p. XXXVI.

20　JubA, Bd. 5-2, p. 32.〈　〉は引用者による。

21　Von Kant an Lambert, 2 Sept, 1770.

22　Lambert, *Neues Organon*, 1764, Bd. 2, Haupt 2, §1.

23　ibid.

24　ibid.

25　光学について、次のように言われている。「実際に、目は多くの素材を仮象に提供するし、目の構造は単純であるから、光の道筋が知られれば、視覚の理論に正当かつ有用な根拠をもたらし、それによって数学的な学問を豊かにするという可能性が開かれている」。ibid.,§ ２.; also see. ibid.,§§24-29.
　また、次のようにも言われる。「光学においては、すでに光の道筋や視覚の理論が根拠として用いられているから、目は際立った優越性を持っている」。ibid.,§69.

26　「光学においては、諸事物は同じ仕方で目にする限り同じように見える、という原則が認められている。

この原則が他の感官にも拡張されれば、感官は同じ印象を受ければ同じ感覚を生じさせる、ということが認められよう」。ibid., §3.; also see. ibid., §5.

どうやら、この原則はランベルト自身によって、『光度測定 (Photometria)』(1760年) において提唱された。ランベルトの光度測定法については、以下が詳しい。ダンネマン、『大自然科学史』安田徳太郎、加藤正訳、第四巻、三省堂、1941年、353-364頁。

27 ibid., §4.

28 ibid., §§4, 91.

29 「超越的な光学」と「超越的なパースペクティヴ」は区別されている。cf. ibid., §266.
一般的に、後者は天文学に関係づけて用いられている。cf. ibid., §§4, 91. しかし、ぼんやりと「物の見方」くらいの意味で使われてもいる。例えば、他者の視点に立って物事を考えてみる、というようなことが意味される場合もある。cf. ibid., §§271, 282.

その一方で、例えば「光学において目の解剖学 (Anatomie) が果たしている役割」という言い方がされているように、光学は視覚に限定して使われているようである。ibid., §99. 実際に、光学は「視覚の学 (Sehekunst)」とも言われている。ibid., §2.

ところで、ランベルトにおいて、「解剖学」とは、「事象そのもの」の構造や機構の分析に関わっている。cf. ibid., §82. そこで、光学は物理学と対置されもする。cf. ibid., §120.

30 ibid., §6.〈　〉は引用者による。

31 ibid., §7.〈　〉は引用者による。

32 こうした場合、「我々は、事象を思考のうちで、いわば眼前に表象する」。ibid., §123. 傍点は原文強調。このように、意識や構想力であっても、仮象が生じる場合には、視覚における仮象がモデルとして考えられているのである。

33 ibid., §§10, 19, 111 f.

34 organische Scheinは、「有機体的な仮象」とも訳されているが、この仮象は器官が障害された場合に生じるものであるから、「器質的な仮象」と訳した。これは、いわば「機能的な仮象」である「病理的な仮象」と一組になっていると考えられる。

35 ibid., §20.

36 ibid.

37 ibid.

38 これらは、ロックにおけるsomething itselfとか、things themselvesに該当するものであろう。興味深いことに、ロックにおいても、「単純観念」は、そうしたものの「写し (copy)」であるという事態が見られる。cf. J. Locke, *An Essay Concerning of Human Understanding*, 1690., IV, Chap. 4.

39 「主観的な仮象は、夢か妄想かもしれない。しかし、客観的な仮象は、単なる可能性であって、思考する存在者なくしては、それが仮象とされることはないだろう」。Lambert, *Neues Organon*, Bd. 2, Haupt 2, §31.

40 「現実的な事物を感覚しているのか、それとも感官における印象によって、そう信じ込まされているだけなのか、と迷う場合には、他の感官の助けを借りて、世界における事物の状況や連関から導き出された推理を役立てる、ということが得策である」。ibid., §43.; also see. ibid., §§39-43.

しかし、あくまでも「感覚の同一性から、端的に事象の同一性へと推理することはできない」。ibid., §69.; see also. §§82, 89, 96. そのため、こうした場合には「帰謬法 (apagogische Beweis)」が役に立つ。ibid., §105. ランベルトは、こうした不確かな推理を好んで「翻訳」と表現している。そこで、ランベルトにおいて、「蓋然性の論理学」は「現象学」に含まれているのである。(ランベルトにおける蓋然性については、手代木陽氏の研究がある。氏の研究は博士論文となって、近々公刊される。)

こうしたランベルトにおける推理とは、おおよそメンデルスゾーンにおける「不完全な帰納」(後述) と

同じであろう。メンデルスゾーンは書評において、ランベルトの「蓋然性の論理学」に言及している。（メンデルスゾーンにおける蓋然性については、筆者による日本ライプニッツ協会と日本カント協会における2012年度の研究発表を参照されたい。）

41 cf. ibid., §§20, 44.

42 ibid., §20.〈　〉は引用者による。

43 「我々のあらゆる認識は諸感官から始まる」。ibid., §34.

44 ibid., §§61, 82.

45 ibid., §§33, 106.

46 ibid., §66.〈　〉と傍点は引用者による。

47 ibid., §81.

48 ibid., §82.

49 ibid., §67. この場合の「可能性」の意味は、上記注 (39) を参照。

50 ランベルトにおいて、「像」は事象を単に一側面から現象しているに過ぎない。

つまり、「光の強さ、性質、種類、また光の反映などは、像が別の色や明るさを持ち、事象そのものがある場所とは別の場所において見られるようにする。こうした原因から、いつも目は単に事象の一側面を、それも特定の仮象的な形や大きさにおいて見るのである。目の場所は、それ自体が視点と言われるが、事象に関しては、事象はあれこれの側面から観察されている、と言われる」。ibid., §24.; also see. §§3, 111, 114, 272. 傍点は原文強調。

しかし、あくまでも「像」は事象に即している。「心理的に空虚な仮象は、表象されるべき事象の側面が、その事象に即していない場合に生じる。それに対して、実在的な仮象は、表象される側面、或は少なくともその像が、事象に即している場合に生じる」。ibid., §287.

また、さらに強く次のようにも言われる。「像」は、「およそ可視的な直観された諸客観を、網膜 (Augennetze) に描き出す (abmalen)」。ibid., §69. なお、ランベルトにおいて、このabmalenという動詞は、必ず網膜と関連づけて使われている。cf. ibid., §§3, 64.

このように、文字通りに目を視点として、事象の一側面が網膜に写し出されたものが「像」である。すると、ランベルトにおける「像」とは、現代の生理学の用語では「網膜像」と言われるべきものである。そうした意味では、この「網膜像」を範型としたランベルトの「像の理論」におけるabmalenという動詞は、メンデルスゾーンが好んで用いているabbildenという動詞と強い対照をなしている。

51 cf. ibid., §§9, 21.;「観念論者の言語においては、物体界に関することはすべて仮定的 (hypothetisch) である」。ibid., §35.「観念論者は、全世界を単なる仮象と看做す」。ibid., §61.

52 「像」は、「言うならば、自然の法則によって諸物体と結び付いている諸々の性質や変様の記号として看做し得る」。ibid., §89.; also see. ibid., §96.

53 ベックは次のように指摘している。「ドイツ語におけるappearance (Schein) という言葉は、光学から導き出されたものであるから、ランベルトは現象学を「超越的な光学」と名付ける。これは、単に諸事物のvisual appearance (Bild) の研究ではなくて、あらゆる様態において、appearanceを研究するものである。Beck, op. cit., p. 408.

確かに、ランベルトは次のように言っている。「仮象という概念なり言葉は、その起源からすると、目や視覚から導き出され、段々と他の感官にも拡張されて、一般化されたが、それにより、より多様なものとなりもした」。Lambert, Neues Organon, Bd. 2, Haupt 2, §2.

しかし、正確に言うと、ランベルトの「現象学」は、視覚像を、いわば諸感覚の範例として、視覚以外の感官における感覚にも一般化する試みである。つまり、「感覚される事物が感官に与える印象は、目に関しては、事象の像と言われる。そして、この像を我々が感覚しているという意識は、見られている事象の仮象に対して明晰な概念を与える。我々は、他の諸感官に関して、私が知っている限りでは、目に関し

て像という言葉が表している事柄を一般的に表す言葉がないのである。それぞれの感官が、その対象の感官によって与えられる像や明晰な概念を、暖かさの像とか、音の像などと名付けようとでもするならば、無理があるかもしれない。しかし、こうした名称は、そうした対象が、感覚に従えば、存在するように思われるということを表現しているのではないか」。ibid., § 5. 傍点は原文強調。

また、次のようにも言われている。「像や型 (Modell) は、写し出された、或は型取られた事象を、各視点のうちに、まさに事象そのものが示されるように表象するが、同様の仮象は、目だけではなく、触覚においても示される筈である」。ibid., § 267.

このように、ランベルトは、視覚像を範型として、他の感官における感覚をも類比的に「像」として捉えているのである。従って、ランベルトの現象学は、むしろベックの主張とは逆に、あらゆるappearanceをvisual appearanceとして一般化した、という意味において、「超越的な光学」と言われているのである。

54 ベックは次のように指摘している。「Scheinは日常的にはillusionを意味しているから、ランベルトは、この言葉を非日常的な意味で使っていることになる。そこで、カントは注意深く、ScheinをErscheinungから区別したのである。なぜなら、後者はillusionという意味を含んでいないからである。しかし、ランベルトのScheinは、それがillusionを意味している場合を除けば、カントのErscheinungと同じ意味である」。Beck, op. cit., p. 408 (note. 58).

しかし、ランベルトにおける仮象とは、あくまでも「事象の像」のことであるから、厳密にはillusionと区別されるものではない。「実在的な仮象」や「物理的な仮象」と言われはするも、やはり結局は仮象なのである。その点、あくまでもメンデルスゾーンは仮象を錯覚と区別することによって、illusionではない現象としての身分を仮象に与えた。

察するに、メンデルスゾーンとカントは、どちらもランベルトを批判して、仮象と現象を区別しようとした。しかし、その方法が違ったのである。

55 Lambert, *Über die Methode die Metaphysik, Theologie und Moral richtiger zu beweisen*, 1762., § 45. in; *Kantstudien-Ergänzungshefte*, Nr. 42, K. Bopp (hg.), 1918.

余談だが、フィッシャーは、ヴォルフ派の哲学者と比較して、「批判哲学者」を「その対象が目である光学者」と位置づけている。この場合、「目」は「見ることそのもの」を意味している。K. Fischer, *Geschichte der neuern Philosophie*, Bd. 3, Mannheim, 1860., p. 16.

しかし、この「光学者」という形容は、そもそもランベルトが好んで用いたものである。もっとも、ランベルトにおいて、目そのものを対象とするのは解剖学である。ランベルトの光学は、あくまでも「見えている」という事柄に関わっている。つまり、ランベルトにおいては、視覚器官についての構造的な研究と、「見えている」ということの事実的な研究は区別されている。そうした意味では、ランベルトにおいて問題とされていることは、「見ること」というよりも、「見えている」ということである。

56 「物体界は、いたるところ、その仮象によってのみ我々に示される」。Lambert, *Neues Organon*, Bd. 2, Haupt 2, § 91.

57 ibid., § 69.

58 JubA, Bd. 5-2, p. 58. 傍点は引用者による。

59 ibid.

60 ibid., pp. 58-59. 傍点は原文強調。

もっとも、この批判は不正確である。ランベルトにおいては、仮象の原因はあくまでも感官であって、知性ではない。cf. Lambert, *Neues Organon*, Bd. 2, Haupt 2, § 19. そこで、幾何学の原則は仮象から独立している。ibid., § 53. 或は、「感性的な像」から「事象そのもの」を抽象する働きが純粋な知性である、などと言われる。ibid., § 122.

61 *JubA*, Bd. 3-2, p. 10. 傍点は引用者による。

62 ibid.

63 ibid., p. 28. 傍点は引用者による。
64 ibid. 傍点は引用者による。
65 ibid., pp. 28-19. 傍点は引用者による。
66 ibid., p. 29. 傍点は原文強調。
67 ibid. 傍点は引用者による。
68 ibid. 傍点は引用者による。
69 ibid., p. 30.
70 ibid., p. 34. 傍点は引用者による。
71 ibid., p. 36. 傍点は引用者による。
72 ibid., pp. 36-37.〈　〉は引用者による。
73 ibid., p. 37. 傍点は原文強調。〈　〉は引用者による。
74 ibid. 傍点と〈　〉は引用者による。
75 ibid. 傍点は原文強調。
76 ランベルトは次のように言っている。「部屋が白く見える、ということのためには、もちろん光が必要である。なぜなら、光なくしては何も見えないから。（中略）光は視覚神経に運動をもたらし、我々のうちに、部屋の色の概念、或はおよそ可感的な対象の概念を生じさせる。〔しかし、〕光自体が色を持っているのかどうか、ということは、答えられない問いである。なぜなら、光線は客体を見えるようにするが、光線自体は見えないからである。（中略）従って、部屋は白い、バラは赤い、と言うならば、我々は仮象の言語を話しているのであり、それを便宜的な仕方（Abkürzungsweise）で用いているのである」。Lambert, *Neues Organon*, Bd. 2, Haupt 2, § 64.

　つまり、対象そのものが見えているのかどうか、ということ以前に、そもそも対象が見えるようになるための光そのものが不可視である、ということである。そうすると、本来的に視覚像は仮象でしかない、ということになる。

77 *JubA*, Bd. 3-2, p. 38. 傍点は原文強調。〈　〉は引用者による
78 ibid.
79 ibid., p. 39. 傍点は原文強調。〈　〉は引用者による。
80 ibid.
81 Lambert, *Neues Organon*, Bd. 1, Haupt 1, § 606.
82 もっとも、ランベルトは「純粋思考」における「中間物」としての記号的な認識についても語っている。この例としては、思考不可能な「非物」を表しているとされる $\sqrt{-1}$ が挙げられている。cf. Vom Lambert an Kant, 13 Oct, 1770. 数学や幾何学におけるランベルトの功績は、こうした「中間物」を用いることによって、つまりは代数学を応用することによって達成されたものと考えられよう。それと同時に、この「中間物」は形而上学において現象学を構想したのである。
83 Von Kant an Lambert, 2 Sept, 1770.
84 *JubA*, Bd. 3-2, p. 15
85 1811年から1813年にかけての、ベルリン大学における知識学の講義を指す。